

# 比較表現の考察

## —授業実践の実例と諸問題について—

中川 右也

### 1. はじめに

人間は、世界の事物を認識する際、別の対象物と比較し、その差異を理解の手助けとすることが多々ある。この人間の認知活動の営みは、言語表現にも顕著に現れる。本稿は、そうした言語表現の中で比較表現に焦点を当て、教育現場での比較表現の教授法の再考を試みることをねらいとする。

### 2. 同等比較における検証すべき和訳

原級(positive degree)を用いた同等比較(comparison of equality)では、次のような検証すべき和訳を見受けることが多い。

(1) Taro is as tall as Hanako. (Attested)\*1

(太郎は花子と同じくらい背が高い)

例文(1)のtallを「背が高い」と訳した場合、slow learnersにとって、次の英文の和訳に戸惑うことが少なからずあるだろう。

(2) Taro is as old as Hanako. (Attested)

(太郎は花子と同一年である)

slow learnersは、例文(2)の和訳がなぜ「同じくらい年をとっている」ではなく、「同一年」になるのかが理解し難いようである。このような混乱を招く理由は、例文(1)の和訳が検証すべきものであるからにはかならない。通例、比較表現で用いられる形容詞はtallやoldなどの尺度形容詞(measure adjective)とbeautifulやhappyなどの評価形容詞(evaluative adjective)に分けられる。この両者の違いは、前者が絶対的意味と相対的意味\*2を有しているのに対し、後者は絶対的意味のみを有するという点にある。

尺度形容詞がhow疑問文や比較表現で用いられる場合、例えばoldは「年老いた」の意味にはならず、尺度を表す「年齢」を意味する。この点において、英語と日本語は共通する。日本語においても、「どのくらいの低さ?」とは言わず「どのくらいの高さ?」と

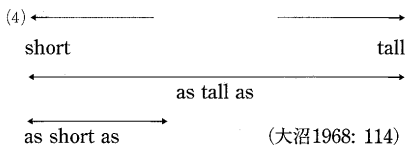
言うように、無標(unmarked)\*3の尺度形容詞を相対的意味に用いる。例文(1)の場合、ただ背の尺度が同等であると及言しているにすぎないため、太郎と花子は背が高い場合もあれば低い場合もあることになる。よって、和訳は「太郎は花子と同じくらいの背丈である」とすべきであろう。

しかし、tallの反意語であるshortなどの有標(marked)の尺度形容詞を同等比較で用いた場合は、次の例のように両者とも背が低いことを前提(presupposition)とし、絶対的意味での解釈になる。

(3) Taro is as short as Hanako. (Attested)

(太郎は花子と同じく背が低い)

tallとshortにおける同等比較表現の意味領域の範囲は、次の図のように示される。



評価形容詞が同等比較で用いられる場合もまた、有標の尺度形容詞と同様、絶対的意味を前提とする。

### 3. 同等比較の応用

同等比較の整序問題で次のような生徒の誤答がよく見られる。

(5) \*He has as many as books I.

このような誤答を書く理由は、as ~ asの～には“形容詞”か“副詞”の原級が入ることを強調した説明がなされているからではないだろうか。それよりも「尺度」の何が同じくらいなのか～の箇所には入ると教え、例として背の高さtall(形容詞)、速さfast(副詞)、本の数many books(名詞)などを挙げて説明する方が効果的であると考えられる。またこのmanyは尺度として、本の「数」を意味することを理解させれば、次のような入試問題にも対応できる。

(6) He has three times as many books as I have.

He has three times the ( ) of my books.

(駒澤大学)

正解は「数」を表す number である。次に、比較節においても「尺度」として意味解釈されるということに注意されたい。

(7) This table is as wide as that door is high.

(Attested)

(このテーブルの横幅とあのドアの高さは同じだ)

このように例文(7)において high も比較節中で用いられているため、尺度としての「高さ」を意味する。

同等比較は、難しいと思われる箇所(格や省略なども含め)を1つ1つ丁寧に教え、生徒が理解できれば、応用問題として次のような例文を日本語から英語にする力を身につけさせることもできるであろう。

(8) Hanako is as beautiful as Ebi-chan is charming.

(Attested)

(花子の美貌はエビちゃんの魅力と負けず劣らずだ)

#### 4. 不等の比較の意味解釈

前節では同等比較を扱ったが、そもそも as~as... は本当に「...と同じくらい~」という意味解釈でよいのだろうか。もし as~as... が「...と同じくらい~」という意味なら、なぜ not をつけた不等の比較 (comparison of inequality) not as~as... が「...と同じ~ではない」(この意味の場合、「それ以上」, 「それ以下」の両義性が成立する) という意味にはならず、「...ほど~ではない」の意味になるのか。本来、命題である「同じ」の否定は「同じではない」にならなくてはならない。しかし、実際はそうならないということ。as~as... が「同じ」という意味ではないことになる。slow learners は、英語と日本語を本来の意味のまま1対1に対応して覚えようとするため、不等の比較の例のように訳語の意味がずれる場合、「構文」という名の下に無味乾燥に覚えさせることは難しい場合もある。次の例文を見られたい。太郎の発話において、①と②のどちらがこの会話ではふさわしいのであろうか。

(9) 花子: Aren't I pretty? (私って可愛くないのかな)

太郎: Yes. (そんなことないよ) You are as pretty as Ebi-chan. In fact,

{ ① you are prettier than Ebi-chan.

{ ② you are not prettier than Ebi-chan.

(Attested)

太郎は In fact (実際は) の後ろで下線部を言い換えようとしている。この場合、①「花子のほうが可愛いよ」と言い換える事は可能だが、②「エビちゃんほど可愛くはないけど」と言い換えると非文となる。その理由は、下線部が「エビちゃんと同様かそれ以上に可愛い」という意味を含んでいるからである。つまり、as~as... を正確に言うと、「同じかそれ以上」(≥) という意味になるのである。よって not を加えた場合、(≥) の同じ (=) が not で否定され消去されて、否定は肯定の反対だから (>) が (<) になり、not as~as... が「...ほど~ではない」という意味になるのである。この文の場合、as~as... は、日本語の「引けを取らない」という意味に近いのである。

#### 5. cute の比較変化

ある演習問題テキストに次のような問題があった。

(10) This doll is ( ) than that one.

(この人形はあの人形よりも可愛い)

この問題のねらいは、pretty のような子音字+y で終わる語を y を i に変えて er とすることが習得できているかの確認である。大半の生徒は、答えとされる prettier としている中、数人の生徒は cuter としていた。この問題は言語事実と照らし合わせると、ある意味において難しい。日本の英和辞典の多くは cute の比較変化 (comparison) を載せていない。比較表現で用いられない例として、形容詞・副詞であっても段階性 (gradability) \*4 を備えていない場合が挙げられる。比較表現で用いられる形容詞・副詞は、段階的 (gradable) である事が条件で、very によって修飾できるか否かでその確認テストができる。

(11) ① \*very dead      ② \*very always

形容詞 dead や副詞 always が比較表現で用いられないのは(11)が示すように、very の修飾が不可能であり、段階性に欠けているからである。けれども問題となっている cute の場合、very で修飾できるゆえに段階性を備えていることになる。ではなぜ cute には比較変化がないとする辞書が多いのだろうか。

その理由は、周知の通り形容詞 favorite 「大好きな(一番好きな)」に比較変化がないのと同様に、cute という語自体にも極限の意味をもっているという考えを反映しているからであろう。英和辞典においても、一部の辞書を除いて比較変化は載せていない

い。LDGE<sup>4</sup>によると、cuteは“very pretty or attractive”と定義している。<sup>※5</sup>この辺りのニュアンスになると、英和辞典の「可愛い」「魅力的な」といった訳語からは正確には感じ取れない。しばしばcuteとprettyなどの同義語のニュアンスの違いについて論議されているが、やはり英語のこうした細部のニュアンスは英英辞典からしか感じ取ることができない。英語教師にとって英英辞典は必携の書だと再認識させられる。

しかし、一部の英和・英英辞典では比較変化が載せられている。実際には、最近使用される例もあるようである。次の例はアメリカのコメディードラマ「FRIENDS」のseason9, 第20話「The One with Rachel's Other Sister」からの一節である。

(12) Amy: You are much cuter than the guy she used to date.

(彼女が昔付き合ってた人よりずっとイケてるね)

ここでのcuteは「可愛い」というよりも俗語(slang)で「イケてる」という意味である。佐久間(2001: 58)によると、cuteの語源はacute(鋭い)を短縮した19世紀アメリカの学生が使用した俗語のようである。cuteのこのような語源から先の例で見た俗語への意味拡張に伴って、本来の語義が薄れた結果、語法も変化しているのであろう。cuteの類似例としてdeliciousもLDGE<sup>4</sup>では“very pleasant to taste or smell”と定義され、比較変化はされないものとされている。言語事実と照らし合わせた場合、生徒への指導内容も考える余地はあるであろう。

## 6. 構文指導の効果と弊害

英語を指導することにおいては、単語・熟語を覚えさせることも大切であるが、構文として指導する際、無味乾燥に暗記させることには一長一短があることに留意する必要がある。次の例文を見られたい。

(13) Which do you like better, apples or oranges?

(りんごとオレンジ、どちらのほうが好きですか)

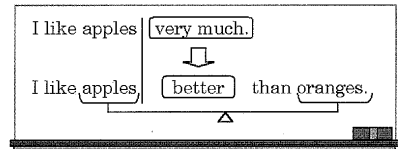
例文(13)くらいの文なら大半の生徒は日本語から英語にすることもできるであろう。それはおそらくWhich do you like better, A or B?という構文がある程度音読などを通して体感させ、記憶させているからである。しかし例文(13)の答えとして「私はオレンジよりもりんごのほうが好きです」を英語にできる生徒は思いのほか少なく、次のような誤答を書く

生徒が多い。

(14) \*I like better apples than oranges.

この主な原因は、例文(13)のyou like betterをひとかたまりの構文として捉えているからではないだろうか。私はこういった生徒の錯乱を避けるべく、次のような板書をしている。

(15)



先の例文(13)やこの例文(15)で用いられているbetterの原級がgoodでもwellでもないvery muchであることまで教える必要があるかどうかは賛否両論あると思われるが、こういった文法の細部を教えるのではなく、板書などをして提示するだけでも視覚的効果があると考えられる。I like very much apples.が非文であると認識できる生徒なら、こうした指導方法も有効ではないだろうか。

## 7. 比較表現から比喩表現へ

比較表現と比喩表現は、as～as...という同じ形式を用いるが異なるという点を、生徒たちに留意させる必要がある。山梨(1988: 30-31)によると、ある対象と他の対象の間の類似点を指摘するだけでは、比喩的な認知を行ったとは言えず、なんらかの新しい認識、例えば類似性を超える意外性や驚きなどの認識がかかわっていなければ比喩ではないとしている。比喩表現は抽象的な対象を具体的なものと較べたり、別のものに喩えたりすることによって、対象の認知過程の手助けとして、文学だけでなく日常生活の場面でも、言語表現を豊かにする一種のレトリック(rhetoric)として使用される。比喩の代表例としては直喩(simile)と隠喩(metaphor)が挙げられる。内海(2005: 7)によると、同じレトリックであっても直喩の方が隠喩よりも詩的に認知されるという報告がある。ここでは直喩に焦点を当て考察してみたい。次の例文を見られたい。

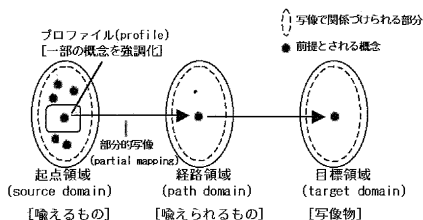
(16) He was a skinny little weak-looking guy, with wrists about as big as pencils.

(J.D.Salinger, *The Catcher in the Rye*) (下線筆者)

(彼は痩せていて、小柄で、弱そうな男で、手首は鉛筆くらいの大きさだった)

もちろん as big as the big は 2 節で述べたように絶対的意味の「大きい」ではなく、相対的意味「大きさ」と訳すべきであり、むしろこの文脈においては「細い」と訳す方が的確であろう。この文の場合、pencils (鉛筆) は small であるという前提があるにもかかわらず、あえて無標である big を用いていることから、強意的直喩 (intensifying simile) のレトリック手法と言えよう。また、文末焦点言語 (end-focus) である英語にもかかわらず、旧情報 (old information) が文末に置かれる理由は、後ろの as 以下の内容でようやく文意が定められるからである。よって、pencils as drums であれば当然意味も反対になり、wrists about as big as drums で「ドラム缶のような太い手首」となる。人が媒体 (輸えるもの) を通して直喩表現を理解する認知過程のイメージ・スキーマは次のようになる。

#### (17) 直喩における概念領域の写像



## 8. いわゆる「クジラの公式」への発展

8 節では、輸えるものによっては否定語を伴わない形式であっても意味的に否定になる例を示したい。

(18) They were all right after Jesus was dead and all, but while He was alive, they were about as much use to Him as a hole in the head.

(J.D.Salinger, *The Catcher in the Rye*) (下線筆者)

下線部は「彼ら (they) はイエス (Him) にとって不要物 (a hole in the head) と有益性において同じ程度であった」ことを意味している。不要物は有益性がないという前提に依拠するため、「彼らはイエスにとって不要物並みに役に立たなかった」と皮肉 (sarcasm) を含意する否定的解釈となる。いわゆる「クジラの公式」も例外ではない。この公式で用いられる A is no more B than C is D においても、than

以下に前提となる明らかに事実ではないものを引き合いに出してクジラは魚ではないことを強調する。解説書などでは、「[CがDでないのと同様AはBではない]と否定語は1つだが、両方もも否定の意味になるので注意」と書かれている。しかし次のように前から解釈する方が言語直感としては自然であろう。

A whale is no more a fish「クジラが魚であるはずは決してない」⇒than a horse is (a fish)。「絶対的にありえない馬が魚であるという程度以上に」

無味乾燥に覚えさせられることが多いこの公式は、話し手の主観的な態度が示された文なのである。すなわち、「馬が魚である」と「クジラが魚である」ということは同程度に可能性がゼロであると客観的に述べられた文ではない。次の例文を見られたい。

(19) I have no money. (Attested)

(20) I don't have any money. (Attested)

上記の例文を音読した場合、no には「お金が全然ない」という主観的な気持ちが表れるが、not には no のような主観性はない。本当にお金に困って「お金が全然ないんだ」という場合、(19)と(20)どちらを発話するかを想像すれば、その差は歴然とするだろう。Bolinger (1977: 19) が「意味と形式の1対1対応の原則」(the principle of one meaning, one form) で提唱しているように、形式が違えば意味も異なる。多くの参考書で見られる no = not any という公式は、正確には同じではないのである。

(21) A whale is no more a fish than a horse is.

≠ A whale is not a fish any more than a horse is.

## 9. 比喩表現から異文化理解へ

ある日、比較表現を教えた授業の後、生徒がこんな質問をしてきた。「[三度の飯より野球をするのが好きです]って、英語では何というのですか」。この質問は、文化的観点から考察すると非常に奥深く、また興味深い問題である。実は英語でも日本語と発想はきわめて似ており、次のような慣用表現を使う。

(22) I'd rather play baseball than eat. (Attested)

一方、同じ「飯」を使った表現であっても、「そんな朝飯前だ」をそのまま英訳しても、日本語のニュアンスは欧米人には伝わらない。

(23) ? I can do it before breakfast. (Attested)

英語では、パイを作るのが簡単だという発想から、次のように表現される。

※4 Doing it is (as) easy as pie.<sup>\*6</sup> (Attested)

こういった例は我々に、文法事項を形式的な側面だけで教えるのではなく、文化的背景なども交えて授業を展開する必要があることを教えてくれる。異文化理解は、このように言語を通して学ぶこともできる。また、そうすることで授業の広がりは無限となり、生徒たちの知的好奇心を刺激する授業へと発展させることも可能になる。外国語を外国語理解のためだけに学ぶのではなく、言語や文化に対する理解を深めるためのツールとして学ぶということは、このようなことではないだろうか。

## 10. おわりに

本稿では、比較表現の文法・語法の考察から、レトリックの解釈、そして異文化理解へとつなげる授業の一例を示した。比較表現は多種多様な分、授業の味付け次第では実に様々な形に展開できる。例えば Two heads are better than one. 「三人寄れば文殊の知恵」など、一見すると難しそうな慣用表現も比較表現を使えば簡単に表現することができる。またその発想<sup>\*7</sup>を指導するものももしろいであろう。

※1 Attestedの表記は、同僚の Howells, G. (英国人)とCohen, K.(米国人)など、数名のインフォーマントチェックを受けた例文である。

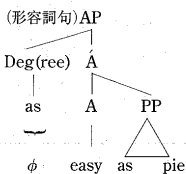
※2 絶対的意味は、「背が高い」や「年老いた」など、プラスの値を含み、相対的意味はそういった値を含まない尺度を表す。

※3 無標は、尺度の度合が高いもので、この場合 bigが無標であるのに対し、smallが有標となる。

※4 段階性とは、程度の大小を意味することのできる性質である。

※5 cuteは、日本語の「愛くるしい」に近い意味であろう。なぜなら「愛くるしい」は「～より愛くるしい」とは表現されないからである。

※6 Swan (2005<sup>3</sup>: 112)によると、直喩で用いられる慣用表現の最初のasは省略可能としている。



比較削除(Comparative Deletion)以外の省略は奇妙に見えるが、このasは文の要素にはならない副詞であると認識することで自然に捉えられるのではないだろうか。

※7 Two's company, three's a crowd.(2人はよい連れ、3人は仲間割れ)と言うように、3人寄ると英語ではネガティブな発想をもつのも興味深い。

## 参考文献

- 安藤貞雄(2005)『現代英文法講義』開拓社、東京。  
 Bolinger, D.(1977) *Meaning and form*, Longman, London.  
 Bresnan, J.(1973) "Syntax of the Comparative Construction in English.", *L. I. 5*: 614-619.  
 Lakoff, G. and M. Johnson(1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.  
 松井千枝(2004)「比較構文の意味」『英語青年』149.12, 45-47.  
 野内良三(2000)『レトリックと認識』日本放送出版協会。  
 大沼雅彦(1968)「性質・状態の言い方/比較表現」『英語の語法 表現篇』第3巻 研究社、東京。  
 Quirk, et al.(1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.  
 佐久間治(2001)『英語の語源のはなし』研究社、東京。  
 澤田治美(1983)「形容詞・副詞の比較-意味解釈の原理を求めて-」『英語教育』32.9, 31-33, 88.  
 Swan, M.(1980<sup>1</sup>, 1995<sup>2</sup>, 2005<sup>3</sup>) *Practical English Usage*, Oxford University Press, London.  
 辻幸夫(編)(2003)「認知言語学への招待」『シリーズ認知言語学入門』第1巻 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明(監修)大修館書店、東京。  
 内海彰(2005)「隠喩と直喩、どちらが詩的か?」『人工知能学会 第21回ことば工学研究会資料』1-11  
 八木孝夫(1987)「程度表現と比較構造」『新英文法選書』第7巻 大田朗 梶田優(編)大修館書店、東京。  
 山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版会、東京。  
 (高槻中学・高等学校)

ご意見、ご感想は下記宛先までお願いいたします。

nakagawa@takatsuki.ed.jp